

「第18回最上川水系流域委員会」議事録

●開会（山形県県土整備部河川課長）

●委員紹介

●挨拶（山形県県土整備部整備推進監（兼）次長）

●委員長挨拶（高野委員長）

●開催趣旨説明

資料2-1

●議事：一級河川最上川水系置賜圏域河川整備計画（知事管理区間）の変更について

資料2-2、2-3、2-4、2-5、参考資料5

質疑応答

○羽越水害時と平成25年7月洪水時の雨量を24時間の流域平均雨量で花見橋上流域と吉野川全流域に分けて比較しているが、花見橋上流域で過去最大の水害であるとしているならば、下流でも過去最大の流量であったと通常考えるが、今回計画とする流量は羽越水害規模で設定した既定計画370m³/sに対し、210m³/sとしているのは説明としてちぐはぐではないか。また、今回洪水が羽越水害以上である根拠として、24時間の流域平均雨量で花見橋上流域と吉野川全流域を比較しているが、洪水到達時間内雨量強度などピーク流量に影響する指標を使うのが正しいのではないか。

→吉野川の流域は吉野川筋と屋代川筋の2つに大きく分かれており、雨の降り方がこの2つの流域で大きく異なることに特徴がある。羽越水害時の雨の降り方は、屋代川筋に集中しており、屋代川筋と吉野川の屋代川合流後において大きな被害があった。このため、既往計画では屋代川筋に降ったような雨が吉野川流域全体に降ったことを想定し、計画流量を決定していた。今回洪水では吉野川筋、特にその上流域に集中して雨が降っており、被災流量が210m³/sであったと整理されている。その特徴がわかる資料として、吉野川筋の上流域に限定した24時間の流域平均雨量と、吉野川筋に屋代川筋を加えた全流域に降った24時間の流域平均雨量をグラフで整理し説明させていただいた。

委員ご指摘の通り、住民の方々が誤解しないよう、今後、地元への説明には、もっと分かりやすい資料となるよう工夫していきたい。

○吉野川の整備目標として、下流は既往計画のとおり370m³/s、今回延伸する上流は210m³/sという説明であるが、この流量が変化するところは川の流入などがいないため、感覚的には上流も370m³/sで延伸すべきではないかと思う。説明として今回の延伸は災害対応であるということであり、県として緊急に整備できるのが210m³/sということを先に言わないと理解できないことであり、これから住民に説明する上でも、説明を工夫すべきである。

→今回定めた整備目標は、災害を踏まえた緊急対応として今回洪水規模まで流下能力を向上させることが主旨です。地元へはわかりやすい説明となるように工夫していきたい。

○吉野川の重金属について説明あったが、このことは非常に重要なことである。河川を工事することだけでなく、掘削土砂に重金属が混じること、それについては法に基づき適切に対応することを住民に対して周知し、工事を進めてもらいたい。吉野川は過去にカドミウムのことで問題になった経緯がある。整備計画本文に記載する必要はないが、事業を実施する段階では、住民の方々に丁寧にしっかりと説明をする必要がある。そうすれば住民からも納得してもらえるのではないかと。

→吉野川の上流域には、吉野鉱山など多くの鉱山が点在し、このため周辺の土壌には、微量ながら自然由来の重金属が含まれていることが確認されております。

当方において吉野川の河道内及び河川周辺土壌から採取したサンプルの土壌溶出量及び土壌含有量を検査した結果においても、土壌溶出量において4割弱のサンプルから基準値をオーバーする鉛とヒ素が検出されました（土壌溶出量基準とは、1日2ℓの地下水を70年間毎日摂取した場合に、健康への影響が「10万分の1増加する濃度」、もしくは「有害な影響がない濃度」）。一方で、土壌含有量は、ほぼ基準値以下の結果でした。このため、事業実施にあたっては、土壌汚染対策法に基づく適正な対応を行ってまいります。

また、事業の実施に向けた地元説明会等においても丁寧に説明してまいります。

○市街地の浸水は河川の氾濫によるものか、内水被害によるものか。

→市街地での浸水の多くは赤湯中学校付近からの越水が影響していると考えている。しかし吉野川は天井川に近く、ひとたび水位が上昇すれば内水が発生する可能性がある。ただ、今後予定している事業では河道を掘り下げる対策を中心に実施するため、内水被害は解消する方向に向かうと考えている。ただし、小規模な内水被害はこれからも起こりえることから、必要に応じて流入する水路等の施設管理者と調整していきたい。

○今回のように河道を改修する場合にはきわめて環境や景観に大きな変化を与えることから、地域住民や関係機関とよく意見交換し進めてほしい。

→設計段階から流域住民の意見を伺い、河川の改修を進めたい。また、河川改修にあたり、「多自然川づくり」を基本としているが、事業進捗にあたり国総研より多自然アドバイザーとして意見を頂戴し、環境に配慮した設計となるように進めている。

○災害対応として、当面は暫定的な目標である210m³/sを目指すとの説明であったが、暫定と言うことは、今後、上流延伸区間についても370m³/sで改修するのか。

→現在のところ上流延伸区間は、既往最大である今回の洪水流量210m³/sが最終計画と考えている。なお、既定計画区間については、210m³/sで整備後、整備計画期間が終わるまでに370m³/sを目標に改修を継続する計画となっている。

○今回の整備計画の変更によりハード対策については審議されているが、地球規模で計画を上回る洪水が多発している状況であり、住民の速やかな避難のために、迅速な情報の提供や避難経路の周知などいわゆる減災について考えることが重要ではないか。

→迅速な情報提供に向けた取り組みとして「山形県河川砂防情報システム」を活用するなどの取り組みを実施している。なお、住民説明会においても同様の意見が有ったため、整備計画本文には関係機関との連携に関する記載を追加することとした。

●その他

- ・月布川における平成25年7月洪水を受けた被害状況及び現在の取り組み状況について
参考資料4、参考資料6
- ・来年度最上川水系流域委員会開催のお願い
- ・大久保委員の退任について

●閉会